麻生路郎★主宰

川柳雜誌

十月號

Pensoj flugas trans la land-limon

川柳雜誌・十月號目次

表紙（路郎主幹の題字）……

川柳陣營の言葉……（一）

沈（艸木徒然）……西田艸樂……（二）

武玉川研究（一三）……梅本塵山　森東魚……（一四）　蛭子省二

語源覺書（十）……淺田一……（一三）

初等川柳講座（一四）……麻生路郎……（一八）

陣中川柳……宵明……（一三）

兒玉花外を憶ふ……高翁亮……（一二）

北支征旅回顧斷片……加川泉泡……（一六）

句評　川柳塔の一句……芥川芥子男……（一七）

硯滴と神風賦……不死鳥……（一四）

★

不朽洞句抄……麻生路郎……（一一）

近作柳樽……麻生路郎選……（一二）

川柳塔……麻生路郎選……（一五）

一路集　白兵戰……戸田孤篷選……（一六）

各地柳壇……（一八）

川協・柳界展望……（一七）　廻轉椅子……（一七）

社關係の人々……（表三）

川柳陣營の言葉

層一層氣魄ある句を創れ
内に敵愾心を燃えあがらしめよ
外に米英打倒心殺の句たらしめよ
戰ひは今や決戰的段階に入る
爾の句を赤き血をもつて彩れ

不朽洞句抄

—麻生路郎—

伊無條件降伏
哀史一篇
南歐に陽は沈む

四十七士の中にゐたよに
よろこびぬ

ロを衝いて
バドリオを罵る日

メガホンで
父一ト役も二タ役も

裏切者の眼へ
ピストルを擬さむ

兼務々々
東條さんへ續く氣か

注射針
黑シヤツ黨の手に戻る

慰問文
子は鶏の數も書き

★

軍屬の自信講道館五段

軍刀がうちにもあると
負けてゐず

看護婦となつて
佛印だよりかく

兵隊で覺えた腕か
種を蒔き

泰にゐるそうなと
稻の草をとり

起重機の如く
働くたのもしさ

腕白が
そうかやつたか體當り

朗らかさ、
柔道着ほどつづくつて

兒玉花外を憶ふ

高翁亮

ことしの初夏、寶塚少女歌劇の創作功勞者、久松一聲翁を悼んだ一文を本誌に寄せたのに、思ひきや、いま初秋、詩人兒玉花外の訃を聞かんとは……。一聲も花外もともに齡古稀、人生に思ひのこしはあるまいが、まだ死におくれてゐる私としては青年時代からの親友二人を相ついで亡ひ、急にうら寂しさを感ぜざるを得ない。

花外がこの大阪へ來たのはもう今から四十幾年も昔のこと、和歌山の小笠原譽至夫の主宰になる雜誌「評論之評論」の記者として迎へられたのであつた。いや迎へるといふと立派なやうだが放浪の詩人が行きどころがなく、まア拾はれたかたち。當時この雜誌には寄稿家として故角田浩々歌客、故松崎天民、高山血來、奥村梅皐その他の面々、かく申す私とてもその評論記者の端くれであつたのだ。

花外は當時すでに熱血の新體詩人として名あり「花外詩集」は青年たちの血を沸かし熱讀愛吟されたもの、大阪に居つた間、いまも中之島公園に建つてゐるあの龜裂の入つた「木村長門守之碑」を見て作つた詩は特に優れてゐて、私も暗誦、夜ひそかに公園に杖を曳いて高吟して氣をやつたものだつた。

ある夏の一夕、船を淀川の中流にうかべ、浩々歌客らと同人同勢四五輩、妓は待さなかつたが酒肴滿載、水上月あり杯中また影を宿す。且つ飲み且つ吟じ、誰憚からず大に時事を論じ合つたこともある。花外は平素すこぶる溫和大きな聲でものも云はぬ程の男であるが、一度盃を口にして醉ひがまわると別人の如く熱血漢の本性を現はして傍若無人、高談放吟、あるひは怒り、あるひは泣き、私を隨分困らしたが一番年少の私を眞に骨肉、弟の如く可愛がつてもくれたものだつた。

私が和歌山市の一劇場で當時の一大話題となつてゐた「藤村操」劇を兒玉怪骨、沖野岩三郎等と演じた時には、花外も一役買つて出で、追悼の長詩を朗々と吟誦して歌客を煙にまいたこともある。

花外は大の親孝行で唯一人の父親を大事に女房も貰はず裏長屋に貧乏生活をしてをつた。大阪には一年ほどしかをらず、去つて東京に行つてしまつてからは東西相別れ、久しく消息も絶へてをつたところ數年前沖野岩三郎が花外がある養老院に收容され公の救助をうけてゐるといふことを傳へきたり、いくらか見舞金を贈らうと二三の同志から集めて沖野がわざわざ遠い東京郊外の養老院へまでゆき久振りに面唔、古い詩集の再出版も世話したと知らせてよこしたので、こちらも些か慰められ、つい忘れるともなく忘れてゐたところ突然訃報を見る。この數奇な生涯を送つた老詩人の臨終のさまや如何に。時は移り時勢は大に變つた、さきに鐵幹ゆき、近く藤村もかくる、いまや明治時代の詩星殆ど光りを消す、やがて新しい黎明來らんとするの徵かとも思へば諦めもつく。あなかしこ。（九月廿四日）

化膿症に
アルバジル錠
20錠 50錠 100錠

沈

—草木徒然(一四)—

西田艸樂

「見せまほうか」と取出して來た百味箪笥の抽斗の中を見ると、黑褐色の木の株のやうなものが二つ、一つは大人の握りこぶし位のもの、今一つはその三倍もあつたらうかテカテカと黑光りのするところと、灰色に粉のふいたところで木目がはつきりとせぬ。

「ヘエ、立派なもんですな！」

懇意な仲だからどれ位金を出したものか、訊くともなく口を割らせると、五六年前に小さい方を六百圓で買つたが、今なら二つで一萬圓で買ふと云はれても賣らぬといふ。

「なんと、此の仙臺樣の下駄一足になりかねる代物がネ」

と、私は應酬する他はなかつた。

だが、ここまで書くと、其代物が何であつたか御想像がついたらうと思ふが、これなん淨瑠璃作者が「めいほく」と振假名をつけた伽羅である。

持主は漢藥の鑑定にかけては日本で右に出る者が數多くはなからうといふ達人であるから、自分共その品位を評する資格はないが、古來、やかましい代物だけに逸品となると途方もない高價なものであることに一驚を喫する他はない。

結構な伽羅だと穴を六つ　古句
あけ
その高價な伽羅を下駄に穿いて
無駄足に召したは伽羅の　古句
御下駄也
伽羅の下駄を踏附にする　古句
高尾

といふ譯で五十四郡の太守樣も臺なしにする古川柳が何十句とある。

知つたか振を言ふ人は、仙台侯の下駄は伽羅木といつて庭園に植ゑるイチヰに似た木だなぞと說明する。御苦勞な

詮議さ、伽羅の御下駄からが、元來歌舞伎芝居の作り事なんだから、そんな詮議こそ仙臺様の三浦屋通ひより無駄な話である。

だが私はこゝでこの伽羅に就て少し書いて見やうと思ふ。

伽羅は沈、沈香、沈水、淺香、棧香などいろ〳〵に呼ばれる。我が南方共榮圏交趾支那、マラツカ、スマトラなどに產する瑞香科の植物アクイラリヤ、アガロカで、巨大なる樹幹に樹脂が溜つてゐる。それを空氣に或は土中に長く放置して樹脂分の少い部分を腐朽させていい香のする部分を採るのであるが、そのいゝ香のする上品がなか〳〵長い年月と、條件がよくないと得られぬと見える。

薫香料としてはこれに越す名香はないと古來もてはやされる。

「しろがねこがねの香爐にさまざまの寶の香をたきたれば、院のうち梅檀、沈水の香に充ち薫れり」と榮華物語にも見え、源氏物語にも、太平記にも載つてゐる。

水鏡の第三十五代推古天皇の條に、「三年と申しゝ春、沈は此の國に始めて浪につきて來れりしなり。土佐國の肅の海に、夜毎に大に光る物ありき。其聲雷の如くにして、三十日を經て、四月に淡路の島の南の岸に寄り來れり。太さ人を抱く程にて、長さ八尺餘ばかりなん侍りし。其香しき事譬へん方なくめでたし。此れを御門に奉りき。島人何とも知らず多く薪になんしける。是れを太子見給ひて、沈水香と申す物なり、此の木を梅檀香といふ、南天竺の南の海の岸に生ひたり。此の木冷やかなるによりて夏になりぬれば諸々の蛇纏着けり。其時に人彼の所へ行き向ひて、其木に矢を射立てゝ冬になりて蛇の穴に籠りて後、射立てし矢を標にて、是れを採るなり。其實は雞舌香、其花は丁字、其油は薫陸、久しくなりたるを沈水香といふ。久しからぬを淺香といふ云々」などとあるが、何分此の水鏡といふ書は正史でない歷史書で千年も前に書かれたものだから、その科學的知識に於ては全く信を置けなく、梅檀と混同したり、花が丁字だなんてことは、當時はそれ位の知識よりなかつたもので無理もない。が日本書記の記事はさすが官撰の史書だけに、

「推古天皇三年四月沈水淡路島に漂着す、一周りあり島人沈水なるを知らず、以て薪に交へて竈に燒く、其煙氣遠く薫りて則ち異れば以て之を獻ず」

と餘計なことが書いてない。

本草書には水に沈むは沈香半沈は棧香、不沈のものは黄熟香と品定めをしてゐる。即水に沈むものが一等いゝ譯である。

前にちよつと伽羅木のことを書いたが、人稍もするとこれと沈香の伽羅と混同する。キヤラボクは、一位科に屬するもので、イチヰはアラヽギとも云はれ、キヤラボクはこれによく似てゐるが、イチヰ、トガ、カヤなど相似た葉を持つてゐる。中でもキヤラボクの葉は小さく、イチヰほどに鋭く尖らない。樹は通常地に臥伏する傾向がある。觀賞用として植ゑられるが、何も仙臺様の下駄の材にまで持つて行く必要はない。

★陣中川柳

陣中へ
判じてくれ
と母の文

寄明作
宰二郎畫

遠征、露營。強くてやさ
しい假名文字の母の文に
勇氣百倍疑ひなしだ。
（路）

語源覺書（十）

淺田一

濡レルといふコトバの語源もよく解かれてゐないが、朝鮮語ムルのmがnに變音して出來たのであるまいか。

かく日本語は隣接國語を來るものは拒まず、スツカリ之を消化して、それぞれ適所に生かしてゐるのである。

木（キ）マライでカユ、又はクイン、安南でケイヤラツプでケなどと同根アラビア語カリ（灰）も同源であらう。木（キ）から杵（キネ）、黍（キビ、木實）などとなり、其變音クからクキ（莖）、クサ（草）などとなり、其變音ケは禾本科植物の名となり、米が出來たかどうかを檢査するのをケミ（禾見）といふ。禾から轉じて我々の皮膚に生えてゐる毛を禾口なぞらへてケと唱へ頰に生えた毛をヒゲといひ、白い毛はシラガとカに變音する。カとしては

カミ（髮）、**カハ**（皮）となる。カミは羅語カピルラとも通ずる觀がある。カハは木の皮としてアイヌでカブ、西藏でもカーワといふ。八重山では木の皮をカーといふ。之等は木の實體でなく皮を木の變音又は外來語で呼んだのである。後には木皮に限らず動物の皮にもいふに至つた。肌は又別の語源である。コとしてはコカゲとかコズエとかコダチ、コガラシ、コビキなど修飾語として多くの熟語を作つてゐる。木の支那音ムー、モク、ボク、又廣東邊の方言にボーシュエといふのがある。我がムクノキ、ムロノキなどは木の支那音から來たのであるまいか。ドイツ語のバウム（木）は他の歐洲語から孤立してゐるが、洪牙利のファー芬蘭のプーや支那のムーと關聯してゐさうに思はれる。ロシア及スラーヴ諸國ではツリエーヴ又は之に似たもので瑞典でツレード、那威でツレー、英語でツリーといふ連鎖が見られ、他方羅語アルボルは佛のアールブル、伊のアルボール等と連銷し、梵語ではヴリクシャで二本の銷も之と連がりさうに思はれる。木の支那音は朝鮮でナムとなり、アイヌでニとなり、樹の方の音と關聯せる樣に思はれるものに西藏のシンがある。

木の根はアイヌ語のニを借りて名付けたのであるまいか。スクネは直系、オホネは大系フリネは舊系、タリネは垂り根で傍系、ムネ（胸）も身根とするより軀幹の意味を見た方がよくはないか、木の方にはミキ（身木）人の方にはムネ（身木）と同義の異語を用ひたと考へられる。根に專用してから根の樣に横にのびることを連想した「寢ル」となる。西藏の Sine「繁ル」といふコトバとして一役を買つてゐる樣である。シは重疊を意味し樹葉の重疊するにいふといふ風の從來の說明よりも西藏の「木」を生かしたとした方が明快でないか。

樒にしても「惡シキ實」「重キ實」「茂實」などあるが常綠である意味から此「繁」を生かしたと見た方がよくはないか。日本語源は大東亞共榮圈の各民族がコトバと共にやつて來れば之を抱擁して各々適所に一役を與へてゐるといふことから出發せぬと解決出來ないといふことを僕は發見した。

○

松山　前田五健

鉢卷は日本のもの勝いくさ
やりぬくの國起重機も天を
指し

正宗寺に參禪

參禪の凡夫に痒ゆいとこ多
し

硯滴と神風賦

不死鳥

「神風賦」と「硯滴」とは朝日と毎日の論說部員によつて書かれてゐる碎けた小論說であり、小隨筆であり、多年讀者を引きずつて行く力に至つては決して小論說や小隨筆の類ではなく一般讀者にとつては社說以上の魅力さへ持つてゐるのである。ところが過日この欄をあはせ讀んでゐた時にふと感じたことであるが「神風賦」が相變らず鋭い筆陣を張つてゐるのに「硯滴」の鉾先が頗ぶる鈍く、いかにも下手な飜譯式に筆勢が亂れてゐるのを感じさせられた。いづれ劣らぬ猛者には違ひないが時に疲れがないとは云へない。論說部員の休養と云ふことは必ずしも毎日だけの問題ではないと思ふ。

一合一本

「川柳雜誌」の合本並びにバックナンバーを御希望の方にお頒けいたします。「川柳雜誌」菊判時代の合本では三卷、四卷、五卷、六卷、七卷、八卷、九卷、十卷、十二卷、十三卷、十四卷があります（頒價各五圓、送料三〇錢）振替大阪七五〇五〇（川柳雜誌社）を利用して下さい。

▼「後の葉柳」は一號二號三號全部で廿錢（送料共）殘部僅少。

ガラス壜代用

金屬代用紙罐・紙コップ

紙容器

丸形・角形・小判形
組立式各種・藥品
食料品・菓子等の
容器として最適

大阪市阿部野區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用　天下茶屋（五八〇二番）
工場用　同　（五八〇三番）

川柳塔

路郎選

手料理に限る限ると主人歸る　芦屋　寺井鋭々

高射砲靜かな日本の秋の月　大阪　橋本綠雨

勤續三十二年

下積は今日も無事故の日をすごし
天職に寒さ暑さの日にさらし　大阪　大西八歩

怪我をせぬ程度に父はつきとばし
ム首相よニッポンの血が欲しからう
滿ち足りた暮しに少し口が過ぎ　伊國バドリオ政權無條件降伏

長靴の底は代用革なりし　震災に直面して（十四句）

見舞客いつち初めは空から來
生命をはつきり意識する日の出
運、不運はつきり家根の下に見る
皇恩の深さ侍從を伏し拜む
一疊の廣さしみじみ思ふ夜
鐵筋の強さ今更見上げられ
全壞の人へすまなく建ち殘る
土地土地の訛うれしく救ひに來
光秀を最後に三日またず死に　友右衛門の死
點燈に都市の心を取り戻し
ぬれ疊慾がだんだん小さくなり
三度目に會へば債務の事にふれ
起ち上る鍬の先なる陽の光り
二度目尙故郷の山河は捨てられず　大阪府　戸田孤篷

僧堂のくらしに無駄の見つからず　兵庫縣　戸倉普天

土煙殘して軍用つツ走り
女中さんに先づ自轉車を稽古させ　尼崎　水谷鮎美

さゝやかな生活が見える天の川　兵庫縣　西川青美

札幌神社早曉參拜

電車なきに鳥居を戻る人のあり　阿寒湖

月の湖アイヌよ蘆笛吹いてくれ
冷えびえと釧路鉛のやうに暮れ　支笏湖

紙になる森を二時間駛つて來　隱岐島

本當の津々浦々にちよと碇り

★

寄席好きな亭主へ妻のつかね髪　尼崎　長谷川三司

改造を小脇に持つた上衣なし　大阪　野元吐空

そちらも雷ですかと電話口
マスカット見舞にもろて退院す　大阪　宮田不二

母さんが彼女の頃の寫眞帳
國旗揭揚微風の欲しい眼で見上げ
傳令の解除〳〵は拜まれる　大阪　乙谷乙平

颱風を受けてローマの世が變り
氣づかつた母若鷲を志願させ　川口　伊古田伊太古

母よりの金鵄ゆたかな煙の輪
赤蜻蛉敵機と見ての子の戰果
徵用へ俺はまだかと小社長　大阪　木下幽玉

全機無事それから本を讀み續け
蛤の强情さをばたとへられ
部長課長主任それから俺の印　大阪　福田妄夢

貰ひ子と判つた夜の日記帳　福井福平氏へ

よき父がよき兵として今ぞ立つ
七圓のカンカン帽で雨にあひ　西宮　加川泉泡

光洋氏の甥の永眠に
つまづくな蓮のうてなにゆくまでは　大阪府　井上登志緒

男なり振りむきもせず征つちまひ
駈足へ秋雲が飛ぶ雲が飛ぶ

夕焼よ僕は滿洲へ征く　體　大阪　市場沒食子

玉碎の記事へ大きく呼吸をし　大阪府　西野一望

三十六ケ國も敵にまわしてるんだぜ君　大阪　岸田風柳

われは百姓ソーダ水より井戸の水　大阪　井關惠美須

歩るく事好きな奴です歩兵です　兵庫縣　上坂茂

暑さなど負けるもんかよアツツ島　大阪　唐津朝美

探照燈夜釣濟まないなと思ひ　大阪　梅田秀溪

モンペイで來ても故郷でふり向かれ　大阪　新川博也

洋裁の看板上げて母と居る　大阪　梅田秀溪

あつさりと負たと云はぬ男の子　名古屋　吉田水車

吊革の手も逞しい軍需工　勤務先社員伊原曹長アツツに散る

キスカ島天祐神助の霧となり　二男出生

油手が又筆をもつ慰問文　決戰の歳に我が家も男の子

應召を秘して殘業して戻り　徒歩出勤こゝにも見ゆる健民譜

進水へ社長の聲もうるんでゐ　物心一如說く先生の鼻の汗

待避壕子供玩具を提げて入る　霧寒し嗚呼北邊の湊川

增產激勵藝妓の慰問派手に來る　軍神のひとりを友にもつ誇

意見また立場をかへた聲になり　風なごめアツツに御旗立てるまで

優越はまだ〳〵沖へ漕いで行く　軍刀の色清清（ハイラル）として眞晝　宮岡白峰

外交の汗にもなれたぬぐひやう　日本の空を案じて書くと決め

爆音へ祖母は感謝をするばかり　君われを待つやしばらく蟲あふれ　松本石曾根民郎

日曜日畑の施肥が座敷拔け　相宿は山の湯らしい口が利け　大阪　正本水客

水鐵砲アツツへ向けた子の瞳　落ちついた見合四十へ手が屆き　大阪　丸尾潮花

エンタツが俺に似るから髭を剃り　平湯溫泉

ブラウスのレースを秋の風が拔け　定期券事故にも會はず期限來る

靴の金打つて停年おとろへず　たまに來た映畫で家をフト思ふ　大阪　尾崎方正

歌劇いまお七の狂ふ雪となり　大阪　北川春巢

壓潰す形で歩くヘルメット　金權と結び末路は忘れられ

よい妓子供が二人家で待つ　大阪　中原銃人

何遍見ても日本の地圖が廣くなり　押されてもドイツは磯の松だつた

落着いて報いる積り云はしとき　ゴム毬の如く彈かん日もあらむ　大阪　中内翠芳

急降下眞似て鳥の鼻をすり　征きし子の噂で今日も黃昏れる

鷲曰く成る程あれが體當り　睦言を猫に聞かれて撫でゝやり　下關　多田市多樓

丸刈の方が此の社の專務なり　茶柱の今日は債券受取る日

訓練に本當の怪我あるもよし　鋲を打つ呼吸もあつて笑ひ合ひ　下關　櫻川不水

夏の海男子はあつち女子こつち

鍬借りて出來た南瓜と思やこそ　大牟田　高田抱逸

後妻もう町にふつゝか者と知れ

防訓も日々の生活に織り込まれ

奥さんに似ぬ警報の太い聲

日光見物五人育てたあとの事　下關　國弘半休

夏やせもせず轉業の威勢よし

愚痴言はず母八十才に成つてくれ　尼崎　小林文月

增產に暑中休暇を返上し

大阪　武部香林

伊國米英に降伏す

裏切つてバドリオ米へ逃げる氣か
ラヂオからローマの鐘はもう鳴らず
傷口を押へて繼子寢てしまひ

銀閣寺

こゝに來て故人の飲みし岩清水

布施　上田翠光

雲月に泣いても繼子は繼子なり
理窟言ふ暇に一ト汗かいて來い

献金をする日の金庫輕く開け
膝の子の笑顔に留守を強く生き

應召待期

遺書を書く墨とも知らず妻は摺り

京都　明石柳炎

通知簿の出來ないものも父に似て
地藏盆耳冷やしてる子も混り
赤褌どこのどなたか禮をされ
ビールに佇つ姿何處やら俘虜に似て
顎紐はみんな續けといふ姿

戰線の廣さそのまゝ住所錄

小郡　長野井蛙

朝の陽に供木となる影長し
子を寢かせ團扇ひとりの風になり

○

句はその人のこころである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である。（新川柳評釋序文の一節）

旬評

川柳塔の一句

芥川芥子男

九月號の川柳塔の中から三句拾つて見た。

われを繼ぐ子と寢る星のふるなかに　民郎

營業用のキリギリスが鳴いてゐる長屋　幽王

圍はれたマッチだ風よさからうな　潮花

この三句の中の民郎氏の一句を批評することにした。

女の子を儲くと作者は前提してゐるので、この句は女の子としてでなくてはならないが、しかしこの句を自立して了へば男の子でも女の子でも差支へないから、私はこの句を自立して、女の子を儲くといふ前提を抹消する。作家は女の子と星とを結びつけたに違ひないから、男の子ではいけないと思ふが、扨て自立したこの句は一體男の子か女の子か、何れを思ふであらう？私はそうした決定は必要としない。

それは或る夜である。夜空は滿天の星で、如何にも星が降つて來さうな夜空だ。この星空の下に自己の偉大な五體は、戰時下の波にしつかりと耐へ、血は沸つて波打つてゐる。一億の國民の中には自分もゐるのだ、自分は今晝の疲勞を癒すべく夜の深い床に落付かうとしてゐる。それは明日への增產に對する休眠なのだ。ふと自分の側に寢てゐる小さな子供に氣が付く、この子供は自分の正系の血を繼いで次代の日本を背負つてゆかなければならない子供なのだどうだらう、まるでこの小さな五體が、何十年もすると立派な偉大な五體になり、立派な理論もはくやうになるであらう。人間とは面白いものである。

この小さな五體が、日本の國民の中に何れ程ゐるであらうか、丁度夜空の星のまたゝきにも似て、數へることも出來やしない。いまこの子供は一人だが、あのキラキラ光る星の一群に入りこめば、この子供でさへ、あの通り光るのだ、いや現に光つてゐる。この日本は日本の子供なのだ。しかも自分の血を繼いでゐる子供なのだ。一呼吸その一呼吸の中には自分の血が吐かれてゐるのだ、さうだ自分にはいま自己の血を分けた自分の子供が、いや日本の一人の人間がゐるのだ。

そこには父親の慈愛が溢れて、この子供はそれに包まれて安らかな眠りに落ちてゐるのである。何事もないやうな夜空の星にも似たかのやうな風に……

この句はこう解釋すると實に作者の線の弱さの中に何んと日本人としての血の濃さをもつた魂がある。その魂は非常な速度で我々を呼掛ける。韻律が非常によい、この感色はこの作家の性格と思想の堅固さを語つてゐる。

この句には理窟は無い、しかし現實の世界と夢幻の世界との區別はしてゐる、感性に對する知性の働力が覗くことが出來る。われを繼ぐ子と寢る、は現實を表し、後句は夢幻である。で解剖してゆくとこの作家は現實に生きながら自己の理想の創造を建設せんとする未來への聯想があるのだ。限り無き活動を認めるのだ。創造へ創造へとゆく道程を認めるのだ。知性的な句である。感性に反應した知性の句であることを認めねばならない。川柳塔中の佳作である。

窓

★停年制が廢止された。日本に老人はゐない筈だ。一人一人が手辨當で彈丸リレーをやるべしだ。南へ北へ。（不死鳥）

初等川柳講座（一四）

麻生路郎

直喩法の句に就て

五葉の句に、

三味線屋蟹を並べたやうに干し

と云ふのがあります。この句のやうに、「やうに」とか「如し」とか「氣味があり」と云ふやうな語を用ひて構成した句を直喩法の句と呼んで居ります。直喩法の句と云ふのは詰り、右に述べたやうな語を用ひて、ある事物を取つて來て、その事物を、類似する他の事物で形容した句を云ふのであります。しかも、その比較されたものは常に種類が異つてゐなければならないのであります。從つて「あの先生は君子のやうに」と云ふのでは、例へ、「やうに」の語が用ひられてあらうと「如し」の語が使はれてゐやうと直喩にはならないのであります。假りに「落花が雪のやうに」と云うたならば落花と雪とは全然種類が異つてゐるので、直喩の形をとりますが、同種の比較では直喩とは云へないのであります。

直喩法の句は、その事物の種類が異つてゐると同時に、比較が非常に斬新でなければならないのであります。比較される二つの事物が全くかけ離れてゐればゐるほど、斬新であればあるほど、興趣の深い句を構成する譯であります誰でも云ひさうな比喩や、種類がよく似てゐるものを比較したのでは折角の直喩法も何等効果を發揮しないので平凡な句、陳腐な句として葬り去られるのであります。しかし比較する事物の聯想を考慮しないで、ただ徒らに新奇なねらひばかりに傾倒いたしますと、飛んでもない駄句となるものであります。又具體的な事物に抽象的な比喩を用ひましても概して失敗するものであります。その點、上掲の「三味線屋」の句は、三味線と蟹との比較、即ち具體的事物と具體的事物との比較、しかも非常にかけ離れたものの比較となつて居ります。この句を一讀して、その奇想天外な比較に思はず膝を叩かされるばかりでなく、その奇想天外さに少しの無理もないのに驚かされるのであります。斯うして詠まれて見ると、句材がつひ鼻の先に轉がつてゐるのに、少しも氣づかなかつたのかと思はされる位であります。

この句のやうに、直喩法の句は比喩に用ひられる事物の對照が、なるべく緣遠いものであり、奇警奇拔であればあるほど、「やうに」が生きる譯でありますが、「やうに」が一向利かない場合には、まるでゴムを嚙むやうな味氣ない句となつてしまうものであります。

次に直喩法の句を幾つか列擧いたしまして、その一句一句につき解說を試みることにいたします。

山水のかりがね墨がはねたやう　（北山人）

捨てられた女のやうに野のポスト　（町二）

殿樣の髷は慈姑のやうにはね　（松雨）

夕刊屋ふるへる樣に鈴をふり　（夢山人）

剃刀のやうに切れやむ男なり　（鮎美）

消防車キチガヒの樣に消えてゆき　（自由朗）

六方は氣の落着いた煤拂　（五葉）

溺れたるかたち空瓶沈み行く　（柳秀）

「山水の」の句は墨色一色で描かれた山水の一軸を詠んだ句であり、あまり名畫でもないので、ポツンポツンと描かれたかりがねを墨がはねたやうだと皮肉つたのであります。

「捨てられた」の句は、ポツネンと立つ野のポストを捨てられた女のみすぼらしい姿に譬へたのであります果して野にポストが立つてゐるかどうか判りませんが、それは町端れと見てもいゝでせう。たそがれてゆく路傍にションボリと立つてゐるポストと、捨てられた女の悄然とした風姿には、どつかに類似點が感じられます。作者は其處を摑んだのでありませう。「殿樣の髷は」の句は繪か芝居を觀ての觀察でありませうが、事物の類似による滑稽味以上に出ないのは直接、生活に迫るものを持たないからであります

「夕刊屋」の句は寒空の下で夕刊を賣つてゐる姿を髣髴とさせるところが句のいのちであります。鈴を振つてゐるのでありますが、鈴の音と共に、夕刊賣が寒さにふるへてゐるやうにも感じさせられます。

錠ルジバルア
中耳炎
扁桃腺炎
敗血症
日
痔核化膿

「剃刀のやうに」の句ではあの男ならと大いに嘱目してゐたのに、いつの間にか、力が鈍つてしまつた男の姿を思はされます。この句の比喩は剃刀の切れやむと云ふやうな一般に使ひ慣らされた語を用ひだけに句意が比較的弱められて居ります。

「消防車」の句は比喩が奇抜なので、迫眞力が非常に強く、いかにも印象がハツキリとして、直喩の上乘の作であります。

「六法は」の句には、句の構成上、「やうに」の語が用ひられてゐませんが、煤拂の如しと云ふ「如し」が省略されてゐるのであつて、これも直喩法の句なのであります。觀方の奇拔な點、何んとなく間の拔けた摑み方が、五葉の作であることをうなづかせられるのであります。六法と云ふのは芝居の所作事のことで飛び六法、片手六法、大入り六法、藏入り六法、狐六法、白旗六法、赤旗六法、一束六法、飛びつき六法などと、いろいろな六法があるそうですが、詳しい事は判りません。ただ「氣の落着いた煤拂」と觀た五葉の觀察の凡てないのに、ほほえまされるばかりであります。

「溺れたるかたち」の句も人間が溺れたかたちのやうにと、「やうに」を入れて觀れば直喩の句であることがすぐにうなづけるでせう。しかしこれなどは形容される事物と形容する事物とが緣遠くない類似であることが効果の幾分を減殺してゐると云へば云へるのであります。この外に、拙吟の

行末はどうあらうとも火の如し

なども直喩法の句であります

以上は直喩法の現代句に就てのみ述べたのでありますが古句の直喩法の句に就ても同じことが言へるのであります

そして古今の川柳を通觀いたしますと、直喩法の句はかなり多く詠出されて居るのでありますが、比較的佳吟は尠ないやうであります。

次に、古句の中から直喩法の句の一、二を例示することにいたします。

冬の田は山茨おろしのやうに見え

生きもののやうにとらへるとろてん

句意は說明するまでもないでせう。

隱喩法の句に就て

隱喩法の句といふのは直喩法の比較を表はす語、即ち「やうに」や「如し」などを省略して、「やうに」や「如し」の代りに、「なり」とか「であり」とか云ふ語や、それと同じ意味となる語や、それ等の語の省略された形式によつて構成する手法であつて隱喩による句は直喩法の句よりも概して力强い表現となるものであります。しかし、隱喩法の句は比較したその意味があまりに唐突過ぎたり、新奇に過ぎたりして、時に難解な句となる惧れがあるのであります。そんな場合には寧ろ隱喩よりも直喩の手法で作句する方が無難であります。

古句に、

うけ出して見れば書間の螢なり

と云ふのがあります。これなどは隱喩の好適例ではありますが、こんな句を下手に眞似でも仕樣ものなら狂句となる惧れが多分にあるのであります。狂句に就ては又別講で詳しく說くことにいたします

現代作家の句では

共々に明日は散る身のかくし藝　（美知夫）

があります。散るは櫻の花に對する比喩であります。句意は說明するまでもありますまい。皇軍の一人々々が死を觀ること、歸するが如き態度であることが感じられる句であります。

その中に義江のバスもある蛙　（五健）

これも隱喩の句でありますぐあぐあと鳴いてゐる多くの蛙の中に、男性的なバスの歌ひ手藤原義江もゐるのであらうと作者は苦笑禁じ得ないものを感じたのであります。尤も藤原義江はテノールの歌ひ手でありますが、義江ほどにうまいバスの蛙もゐたのでありませう。私の現在住んでゐる土地の蛙はアルトで歌ひ、前にゐたとこの附近の蛙はソプラノであつたことも面白いと思ひます。

換喩法の句

換喩法の句に就て談す前に換喩とはどんなものであるかと云ふことを一ト通り述べる必要があると思ひます。換喩と云ふのはある事物の代りにその事物と實際上關係のある名稱を使用することであります。モンペイと云ふ語をモンペイを穿いた女、卷脚絆といふ語を卷脚絆をつけた男の代りに使用する場合を換喩と云ふのであります。大學生を角帽と云ふのも換喩なら、大臣の位を大臣の椅子と云ふのも換喩なのであります。

近松の作品を讀むことを近松を讀むといふのも矢張り換喩なのであります。何れもその事物に附隨した性質の中で尤も重要なものを、その名に代へて印象をより强化することであります。要するに換喩は原因と結果、記號と實物、屬性と主體、道具と使用者の名を取り換へることなのであります。そして印象を効果的にする修辭なのであります。

川柳では從來、伊達卷が煙草を喫つたり、鉢卷がすてて こを踊つたりするやうな例は幾らもありますが、伊達卷が煙草を喫ひそうな筈もないし鉢卷がすてて こを踊りそうな筈もないのでありますが、さうした作品に於きまして「伊達卷が」とか「伊達卷は」と云ふ語法は「伊達卷をしてゐる女が」であり、「伊達卷をしてゐる女は」であると解すべきで、即ち換喩法の句なの

であります。しかしあまりに不自然な句意となるやうな場合には採らないのであります

ここに、

窓口は金の値打に扱はず
（鋭　々）

と云ふ句があります。この句にいたしましても上五の「窓口は」は窓口そのものではなく、銀行や郵便局の窓口にゐて金錢を扱つてゐる人を指してゐることは云ふまでもないのであります。

短詩川柳がなるべく文字の壓縮を計らなければならない句の構成上、換喩法を用ひることの多いと云ふことは理由のないことではないのであります。

身を以て指導する氣のナツパ服
（米　三）

と云ふ句もあります。これも換喩法の句であります。例句は幾らでもありますが、作家が換喩法を案外くみし易い叙法と思つてゐるのか、苦心の作が甚だ尠ないのであります。今後換喩法の句については、今一段と研究の必要があります。上述の句の下五のナツパ服は服そのものでなく、ナツパ色の服を着た工員の代りに使用した語であることはすぐに想見し得るところであります。

ランドセル親の地位など考へず
（杏　三）

この句も換喩法の句であります。ランドセルの頃は買つて欲しいものは、何んでも買つて貰へると思つてゐる時代であり、うちのお父さんが一番偉いと思つてゐる時代でもあります。親の地位などが判らう筈もなく、判らないところに子どもの世界が存在するとも言へるのであります。

一體換喩と隱喩とは句作上同じやうな効果を持つものでありますが、その性質は全く異つてゐるのであります。例へば頭の禿けた男を禿頭で表はすのは換喩でありますが、これを藥罐と云ふたとすればそれは隱喩なのであります。つまり換喩は本來關係のある名稱を用ひるが、隱喩の方は作者の聯想上關係のある譬をとるとこに相違があるのであります。

提喩法の句

提喩法の句は實際上の効果から見ると換喩法の句と同じであります。中には語の用途によつて換喩ともなれば提喩ともなる場合もあるのでありますから、提喩を換喩の一種だと見ることも出來るのであります。次に提喩とは一體どんなものかといふことを少しく述べて、提喩法の句に及ぶことにいたします。

提喩と云ふのは物の一部分の名と全體の名、種の名と屬の名、箇の名と屬の名、抽象の名と具體の名を取り換へて効果的にすることであります

つまり禿頭といふ一部分を捕へて、頭の禿けた人のことを云ふ場合が、物の一部分の名と全體の名と取換へた一例であります。これを川柳の構成上に應用したのが即ち提喩法の句なのであります。句を例示して、解説を試みることにいたします。

人生の此處は墳墓のすぐ隣り
（寂　郎）

この句の場合、死と云ふ抽象名詞と墳墓と云ふ具體的な名詞と取り換へて、句の印象を歴然とさせて居ります。

俺の身へせまつて來るはパンのみか
（露　斗）

この句に於て、パンと云ふ語はパンそのものを述べてゐるのではなく、生活に要するすべてのもの、即ち衣食住全體と取り換へられた語なのであります。作者にひしひしと迫つて來る生活苦をパンによつて云ひ表はしたのであつてここに提喩法の効果があるのであります。

心まで霞のかかる春の日ぞ
（春公子）

これは心まで長閑になるといふ抽象名詞の代りに、霞といふ普通名詞をもつて一段とのどかさを表はしたところに提喩の提喩たる力を發揮してゐるのであります。

湯氣の中アダムとイヴの二人也
（珍　郎）

この句は男女の情緒の濃まやかなことを表現したいがために、アダムとか、イヴとか云ふ固有名詞を持つて來て、男や女の代りに使用してゐるのであります。尤もベーベルの婦人論によるとイヴは一人の女の名でなく、ある種族の女全體に與へられた名であると云はれて居りますから、固有名詞だと云ふのは妥當でないかも知れませぬが、この作者は固有名詞として使つて句をより力强いものにせうとしたのであります。假りに彼は東郷であると云うた時、東郷と云ふ固有名を豪傑といふ普通名詞の代りに使つて印象を强めるのと同巧であります。

倒置法の句に就て

特にその語に對して注意を喚起させたり、語調を整へるために、「高いなあ、あの山は」「來て見ろ、お前も」、「美しいではありせまんか、この花は」。の如くわざと正序法に從はずに、語の配列を逆さまにする方法を修辭上倒置法と稱して居りますが川柳に於きましてもこの倒置法で句調を整へ、句意を强める一手法といたして居ります。

臣道一途
奉公の道は一と筋神代より
（東　魚）

この句は倒置することによつて句調が整ひ過ぎるぐらゐ整つて居ります。生を日本に享けたものの三誦すべき力强い句であります。この句を正序法の配列によつて構成した

とすれば、おそらく平凡な老となるでせう。

古きトランプパラパラとくりて見ぬあの頃の（おさむ）

あの頃はほんとに樂しかつた。あのころはどうであつたと、古い昔を懷しんだ句でありますが、共にトランプで占ひ遊びなどして興じたことを想ひうかべて、パラパラとトランプを繰つて見たといふのであります。そのトランプからは樂しかつた思ひ出が次ぎから次ぎに流れ出て來るやうにも感じられるではありませんか。この表現の持つ効果はこの句の構成が倒置法によつてゐるからではあるまいかと思はれるのであります。若しこの句の下五、「あの頃の」を眞先に据えて、「古きトランプパラパラとくりて見ぬ」と叙したならば、なるほど懷古の句であることは判りますが、餘情と云ふものが全く消え失せた感じがするのであります。ただ單に倒置しただけで、想ひ出は次ぎから次ぎへと盡きないとすれば倒置法なるかなと嘆賞せずにはゐられないのであります。拙吟の

思はざりき娘が二十四にもなり

も、倒置法の句であります。男の子に對しては、斯うした親ごころは出さないかも知れませんが、結婚適齢期をまさに過ぎやうとしてゐる娘に對しては「思はざりき」といふ感が深いのであります。それは親は親としてまた老ひ込んだといふ譯ではなく、親自體の闘ひのさなかにあつて、日の過ぎ行くを知らぬからであります。しかし思はないのではないのであります。人の親としての惱みは惱みつつあるのであります。そこに斯うした句が生れて來るのであります。この句にしましても倒置法であるがために、句意をウンと强からしめて居り、迫つて來るものが感じられるのではないかと思ひます。

ひよいと來てひよいと起重機馬を吊り（紅ン坊）

强い軍國風景の句であります。かくして人も馬も遠征の途につくのであります。起重機が、ひよいひよいと來て、ひよいと馬を吊るのでありますがこの句も倒置法で狀景を躍如たらしめて居ります。

いつそちぎらうかシヤツのぶらぶら釦（靜觀堂）

語の配列をさかさにしたので面白味の出た句であります一寸くつつけて呉れる人のゐないと云ふ淋しさもほのかに感じられる句であります。

寢てばかり誰にも云へぬ悲しみに（閑生）

倒置法で、より感傷的にした句であります。この句の缺點は人物がハツキリしないところにあります。

唯歩くだけです牛の農繁期（柳秀）

作者はただ歩くだけだと觀て居りますが、此の句から孜々として働く牛の汗を見逃すことが出來ないのであります それは倒置による「牛の農繁期」の下八によつて感じられるのであります。

エゴイストかなはねばもう死ぬる氣の（多喜女）

これも倒置の句であります「かなはねばもう死ぬる氣の」がエゴイストを形容してゐる齣でありますから、正序法で行けば「かなはねばもう死ぬる氣のエゴイスト」となる句でありますがそれを倒置して句意を强めたのであります。僅に配列をさかさにしただけでこんなにも句の力が違つて來るのであります。

何がめでたい疊がてこほこ（松郎）

この句は新年吟であらうと思ひます。世間ではよい春だと云つて芽出度がるが、貧しい生活をしてゐるものにとつては何が芽出度いのか、辛じて春を迎えたに過ぎないではないかと云ふのであります。その貧しさを疊のでこほこで具體的に表現したのがこの句のヤマであり、しかも惠ぐまれない心境を巧みに描出して居ります。

この句は七・七型の十四字詩でありますが、十四字詩型のしかも名詞止めといふ硬さが嚴しい貧しさを表はすのに適して居るのと、語の配列が倒置によつて、それに呼應してゐるので一層斯うした場合の描寫にふさはしい形をとつてゐるのであります。

一戰欲しいか軍馬もいないて（美知夫）

句意は說明するまでもないと思ひますが、戰線に於ける勇士の意氣は天を衝くの慨があるではありませんか。この句は倒置によつて、句勢がハツラツとして居ります。

要するに倒置法は主語と述語との位置をさかさにするか客語や補語を主語より上に持つて來るか。客語と述語との位置をとりかへるかによつて構成されるのであります。そして倒置の手法はどちらかと云へば感激的な表現に適するやうであります。從つて「一戰欲しいか」と云ふやうな强い句ともなれば、「思はざりき」のやうに感傷的な句ともなるのであります。

麻生路郎著
新川柳評釋 定價〒 ○・八○ ○・○八
本篇の川柳で一粒選りの名句を篤め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

藤村誠一著・序文 麻生路郎・百田宗治
隨想集 詩人複眼 定價〒 一・○○ ○・○八
川柳眼で書かれた隨想集。その大半は高雅亞鵝のペンネームで「川柳雜誌」に發表されたもの。

戸倉普天著・麻生路郎序
普天隨筆 （非賣品）
川柳人の隨筆の面白さは又別である。この塊合の面白さは滑稽といふ意味ではない。辛辣に近い觀察の鋭さの謂である。著者は日東紡產業の專務。（實費三圓送料二十五錢で頒つ）

戸田孤蓬著・麻生路郎序
柳川 二千六百年史 定價〒 ○・九○ ○・○八
著者一人の創作・詠史川柳の尖端をゆく。

街の雜音（實切） 大空（實切） 人の一代（實切）
累卵の遊び（實切）

發行所 不朽洞
大阪市住吉區西代万五西ノ二 振替大阪三〇三九二番

近作柳樽

路郎選

ぶどう籠持てば貧しさ繪の如し　大阪梨里
涙知らぬ女のほゝのかたいこと　同
繪にかいた單衣の線を持ちしひと　同
姉妹が二人になればよくしやべり　同
はけまうか今を懐しも日もあらむ　同
袈裟御前私も欲しい心なり　同
理想ですもの默つて聞いてゝくれるでしよ　同
獨りなる窓に銀河とこほろぎと　松山春江
傘あづけ千人針の糸結ぶ　同

伊豫絣の祖かな女の碑にて

碑の前をしばしは去らずモンペ隊　同
いま在ればかな女卒先モンペ穿き　同
その孫の孫がモンペにした絣　同
金の世と悟り腹だたしい手紙　西宮萬龜子
赤蜻蛉隣は今日がひと七日　同
ベララベラ舌嚙むようにして覺え　大阪ひさみ
素晴らしい戰果に答へ車押す　同
學鷲の機影母校の屋根を過ぎ　同
浮世ですなどと主人を言ひ負かす　下關水月
親戚の子を見違へた久振り　同
一坪の畠本まで買ふて來て　同
勝つ爲の轉業こゝも月月火臺　中武士
商魂を捨てた職場の脂汗　同
男工の技術へ迫る女の手　同
子を征かせ獨りになつたモンペ穿く　貝塚庸司
夕燒小燒女の子から唄ひ出し　同
宿直の看護婦亂歩讀んで居り　同
高野山開けすぎてるのを嘆じ　西宮寒草
美人なりなか〳〵悒れぬ女事務　同
戀人が海を渡つてビルマまで　同
强引すぎて隊長の負將棋　大阪白雨
朝顏の窓を戰陣訓が洩れ　同
夕立のなか赤襷發つてゆき　同
ソプラノの話術で社交會の華　鳥取縣悟志
陣中の月へ隊長歌も出來　同
死場所を得たと涙も見せぬ母　同
象の鼻日の丸を持つことに馴れ　泰風來子
象の鼻背嚢を持ちたがり持ちたがり　同
象の脚跡二脚目に歩き　同
若人をじつとおかない海の色　大阪府松綠
年寄へ娘寢た振りして立たず　同
坐つてた奴等が先に降りんとす　同
コロ〳〵と虫が啼きます軍事便　奈良縣カズヱ
親は子に子は孫に言ふ大戰果　同
月當番女主人の子が綺麗　同
今日も一億働き拔いて暮れ　和歌山宏方
歸還して疊の上の飯の味　同
モンペーにする純綿を探し出し　同
風呂(出た留守のラヂオは浪花節　大阪詩朗
召され征く父へ小さき擧手の禮　同
生垣の奥のピアノも遠慮して　同
甲種合格初めて父の酒をうけ　尼崎利一
適齡に遠く勅諭はもう覺え　同
改札は鋏の音でせき立てる　岡山緋智朗
安ライター遂にマッチの世話になり　同
荒鷲になれよと祈る枕蚊帳　同
女學生氣質下着も敷いて寢る　大阪照二
一棟を背負ふ組長の高ぶらず　同
持ちかへて右手は强いものと知り　同
日本は勝つ國隣また生れ　神戸花穗里
急行で行こうと言ふも都會人　同
やがて征く友もきいてるペートーベン　荒尾勢津
子の智慧を笑つて捨てるにしろと惜しく　同
帝亞丸元氣な顏であつてほし　尼崎美世子
瓜刻む手っまだ〳〵嫁けません　同
顎鬚をもう拔く程の歲となり　大阪邦太郎
質受の時計暫く耳に當て　同
買出を輕蔑してる軍需工　大阪研太
十五夜を產業戰士として拜み　同
ソロモンのニュース(白衣佇ちつくす　壕北要兒
夏草の中に眠れるボーイング　同
口下手はストローはかしかきまわし　大阪美奈子
何してるか俺は元氣と軍事便　同
二階でもいゝと夫婦にある決意　出雲弘樓
待つあるの備へ二階の砂袋　同
母白髮自立の遲い身をなげき　兵庫縣柳秀
兵隊さん指の煙草の名は「譽」　同
翼壯の誓ひへ月がまんまるう　德島樂山
算盤もお國に盡す彈ぢきやう　同
小道具の愚痴になつてる役者連れ　愛媛縣正佳
お吉さん大日本は勝つてるる　同
學務課は誰はゞからぬ笑ひ聲　神戸小城子
擧手の禮しづかに通る背に感じ　同
バス搖れる度に茄子が首を見せ　大阪(秋子改メ)嘩子
人思ふ日もあり娘ごころかも　同
曼珠沙華東海道を汽車はしる　兵庫縣花子
月にひく影情薄に見へる秋　同

園藝の どこも淋しい 秋の花　大阪 夏子
金さんと呼ばれ内地で嫁をとり　同
出征旗 露路一ぱいの 幅で出る　西宮 花奈女
心境の 變化十錢 貼つて出し　同
持ち場から歸る樂しい灯を求め　京都 宕川
國の子と なる軍服は 母が着せ　同
學鷲に おなりなさいと 許婚　大阪 葉光
故郷は 理科の教室 朝の露　同
色街の畫ジャガ芋を分けて居る　兵庫縣 春童
特急の 中で封切る 親展書　同
理論では 無い起きて來い朝の道　貝塚 保

看護婦〇〇出征

動八が 胸に大きい 救護班　同
目じるしの 通天閣は 出陣し　大阪 笹路
女醫の母 子の缺席を 證明し　同
見晴らしのいゝとこ重き任務持つ　大阪 三丸
落付いて 機敏に嫁の 防護服　同
お醫者さんへ月當番が廻つてき　貝塚 龜容姿
吠えられてやっぱりモンペ逃げてゆき　同
隊間なく 網干してある 海の幸　大阪 柳久
管制下我が家へ聲を掛けてみる　同
芦麻植えて寸土尊くさかんなり　廣島 大陸
氣がつけば母の日課は午前四時　同
造船の ひゞき南の 海が待つ　貝塚 蓑笠
又銃して夢ですゝつた郷子の味　同
黄菊 白菊 凱旋 を待ちぬべし　京都 春渉
新聞は女房の手から子の手から　同
神兵の地圖に行けない道はなし　貝塚 堅一
寢靜まる 町に火叩き 嚴と立ち　同
決戰の 空へ備へて 乾飯する　貝塚 秀兒
獨立へ國家代表 若返り　同
バリカンの 一筋青く 筋を引き　貝塚 莊兒
松籟に負けラヂオ體操風に乘り　同
譯文はやはり敵性 臭いなり　州本 鳥巣
練成に 空も協力してる 色　同
父母の愛一つに享けて甲種なり　貝塚 千舟
ヒマ植えて 闘志燃えてる 綴方　同
增産の 雨だ蛙よ もつと鳴け　貝塚 久雄
親切を だしてそれから 貧乏し　尼崎 光洋
二月堂すらすらと芭蕉の句　大阪 一昌
運が向くやうにやさしい妻が來る　大阪 柳笑
飛行機がとぶとぶ月こまつすぐに　大阪 悠花里
隣また 靴ぬすまれた 事を言ひ　大阪 花鶴子
鉢巻 をしてて魚屋 暇があり　大阪 花代子
夕立へしばらく休むハイヒール　大阪 千代
明日は征く體へ父がついでくれ　大阪 利美
待ちぼうけ 一人で歸る 鼻へ雨　大阪 石園
思ふだけ走つてくれぬバスの雨　大阪 よしを
白雲は 表忠碑より 湧く如し　正雄
南瓜飯のたき方を聞くもらい風呂　奈良縣 彌生
米機今 藪蚊の様に はたかれる　尼崎 一馬
朝夕は 鷄で賑合ふ 隣組　奈良縣 翠峯
雲走り 綠がそよぐ キャンプ村　尼崎 登美子
想像に 任すとあとは 笑ふだけ　大阪 一丙
再會の どちらも同じ 少尉殿　東京 青衿子
火叩きも 揃ひ戰ふ 新家庭　滿洲 しけを
日曜のビル街そつと暮れてゆき　布施 龍夫
結論は 自分勝手に こしらへる　津山 燦太郎
貯金帳 母の勞苦が 秘めてあり　貝塚 陽人
七夜から 御民の一人 貯金帳　貝塚 潤三
看護婦の モンペ矢張り 白い布　滿洲 青穆
平壤牡丹臺
遠望は 遙か祖國へ 暫し向き　朝鮮 紅多呂
土に臥して北斗も吾もまたゝかず　滿洲 曉童
全機無事歸還滑走路どつと暮れ　濠北 柳兒
美しい 娘のゐる春の 屋臺店　堺 琴美
熱し易い人の行き過ぎ認めとき　奈良 昌平
子の時局談父は嬉し聽いてゐる　大阪 定ひち
月月火水工場の 黒煙　松江 祥月
二百十日 一家樂しい 箸の音　松江 初惠
ドリヤンのこれが葉でなと軍事便　貝塚 青芒
警報は 構えに破れ 解除さる　大阪 聖仙
大の字の明日へ頑張るよい寢息　貝塚 正起
落書もうまくなってるボーイング　貝塚 勇
奉戴日 奉仕の朝が 晴れ渡り　吳 白雪
增産へ一ト息入れた 盆踊り　大阪 松樹
決戰夏 學徒の聲は 空を征き　兵庫縣 葛藤
神聖な 國土の秋の 富士は澄み　尼崎 治
制服が まだよく似合ふ 女事務　大阪 醉童
寄書に撃ちてし止まんの文字も見え　大阪 史葉

新會員を募る

松坂藝能講習所　川柳講座

（松坂倶樂部改稱）

▲戰時生活下の常識として川柳を知りたい人▲人間陶冶の詩として川柳を創作したい人▲從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▲松坂屋百貨店（日本橋筋三）の七階にある松坂藝能講習所の麻生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後二時から新形式によつて開講（作句・添削批評講義等）會費一ケ月一圓入會希望者は七階の講習所受付へ申込まれたい（川柳講座幹事）

武玉川研究（一三五）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

五編（一七）

（271）

馬喰町御捌譽て酒を買

省二＝諸國から談合のある馬喰町の宿屋は、公事宿として古句に多く取扱はれて居る。公正なる御捌により勝訴の喜びを、酒買つて自祝。

東魚＝自分等の言ひ狀が通つたのだから、誠に分つた御奉行樣だと譽めるのも無理がない。逆に負けた方は、分らない奉行めだと、やけ酒位やつてゐるだらう事が想像される處に穿ちがある。

塵山＝前の二説に異議無し

（272）

みとり子のつまミ初ハ蝶の羽

省二＝羽をひろけて、バタ〳〵させたり。疊むだりするのは、幼兒にはもの珍しきもの、つまんでみたくなる。又乳母なども、つまませてみたりする。―（太刀持のつまんでありく蝶の羽―武9）

東魚＝いたいけなものの對照。輕い巧味がある。

塵山＝嬰兒の食初といふのは有れど、撮初といふのは無いから、此の句は少し可笑しい。

（273）

鞘の出る合羽も今ハ持ぬ也

東魚＝子規の句に『五月雨の合羽突張る刀かな』と云ふのが、確かにあつたと思ふが、破れ合羽なら其鞘もあらはに出やうが、それさへない御不勝手振りなのであらう。

塵山＝痩浪人の境涯であらう。

省二＝「も今は」と强めてある。

（274）

髮結て淋しく見える海士の貞

省二＝髮を結へば引締つた感じを與へ、それが淋しい味を加へもする。いつもと見馴れぬ顏つきになるからだ。―（「あわびを取らぬ日は髮をゆふ」（武9）

東魚＝繪などで見ても、髮を下けてゐる。その方が趣が深く海士らしくも思はれると云ふ氣分が、句の裏にあるわけだ。

塵山＝「海士」とあれども、女海人に相違なく、その髮を結つたのは、少し變に見ゆるであらう。

（275）

妾をねめ〳〵人參を干

東魚＝あやつが病の元、毒の種だと妾をねめて、强精藥人參を干す可笑味。

塵山＝毒が藥を煎じて居るのである。

省二＝口々に妾をにくむ御大病、といふ句もあるが、妾をねめ憎くむさまが、人參で强く現はしてある。

（276）

さかなに反りを付る冷水

省二＝少しでも水をうつと、生き生きとした感じを與へるものだ。「反りを付る」はよい詞だ。―『娘に反りを付る晴天』といふ句が後に出る。

東魚＝一讀一掬の涼味を覺える。

塵山＝夕河岸の鯵で、晩酌の好下物と見ゆる。

（277）

言ほと言て跡のない尼

東魚＝いつまでも根にもたぬ、男のやうに、さつぱりした心持ちが、相當年とつた尼である事を思はせる。

塵山＝自身の懺悔をするの歟。

省二＝「言ふ」のが何んであるかは、判り兼ねるが、懺悔話なりせば、句趣は一層加はる。が兎も角「あとのない」が焦點である。

（278）

大黑ハ慾にかまけて能表具

省二＝福の神の大黑樣の事か。「大黑は」を大黑をばと解して、一層慾深くも招福の爲に、能い表裝仕立にして置く。

東魚＝能い表裝をして、粗略でないやうにつとめる處が、大黑天の利益を疑ふ人間の慾の笑止さである。

塵山＝大黑天が自ら慾にかまけるとも、聞き取れる句で、少し變である。

（279）

燒鼠昆布に山桝ハへらず口

省二＝「昆布に山桝」は、梅に鶯の如く配合物の譬。昔昆布で製した菓子に、山椒が混ぜてあつたものを、「みづから」と稱せしより起るとか。「燒鼠に狐」と云つて、猫に鰹節の類。鼠を燒いたものを餌にして、狐を捕へたのである。「鼠のテンプラ」とも云ふ。此句俚諺を二つ用ひた丈けのもの、へらず句とでも謂はんか呵々。

東魚＝少し對照が、適切でないやうに思はれる。―つきものだと云ふ意味なら、よささうにも思ふが。

塵山＝下五の「へらず口」も適切でないやうに思はる。

（280）

目で咄する所ハ目たらけ

省二＝以目傳心の微妙な場面に於ては、そのあたりは目だらけに人目がある。心配りをして目にものを言はせぬと、噂の種を蒔く。

東魚＝人目が多い中であればこそ目と目で思ひを通はせると云ふ、皮肉な詠出である。

塵山＝例の疊字體であるが、作者が苦心した句らしい。

（281）

坂本へまついさくらをくれて行

省二＝坂本町（下谷）の句かと思ふが。

東魚＝近江の坂本ではないか。滋賀の都の櫻狩、手折つた枝も一日に色もあせ、散りもしたので、坂本へすてゝ行くとでも云ふのではないか。

塵山＝東叡山下の坂本町だと、自分は思ふ。

（282）

帆て行日にハ皆椀て喰ふ

省二＝帆を掛け少し遠くまで出る折りは、皆椀へとり込むで食べる。「椀で喰ふ」とは、舟をやる樂しみを現はして居りはせぬか。

東魚＝至極穩かな舟行なのであらう。皆食事も進む。順風滿帆辷るやうに行く海路の趣。

塵山＝「椀で喰ふ」理由が、自分には能く解釋が出來ぬ。

（283）

ちろりの最期逆さまにつぐ

東魚＝ちろりは比較的背が高いから、酒が底に殘りがちであるので、最後は逆さまにして、一滴も殘さずつぐのである。

塵山＝現今使用される燗德利は、近世に創作されたもので、古くは銚釐ばかり使用されたものらしい。

省二＝勿論德利でも「逆さま」は働く。私は平素ちろり許り用ひて居る。先年信州の古道具屋で、指樽と燗鍋をみた。旅行中荷厄介なので求めなかつた。ちろりの句は二篇に『銀のちろりの通ふ紅閨』。四篇に『ちろりにて心安きをさかなにて』柳多留八篇には『いみぶくをいふなとちろり二つ出し』。廿五篇に『お妾の勸めて銀のちろり出來』。私のも銀製だ。口からチョロ〳〵と出る故の名だと「松屋筆記」にある。

（284）

たいこ持三味線か出て長り

省二＝お盃頂戴で大にはしやいで居たが、三味線が出たので、口をつぐむで一寸長る。藝人仲間の禮儀でもある。その長る樣も亦笑ひを買ふものではあらう。『三味線がやむと扇を鼻へあて』。

東魚＝前說の如くで、一寸した瞬間の緊張した、情景が思はれる。

塵山＝藝妓ではなくて河東節の師匠などが席に出たものと思はれる。

（285）

釜拂吹出す湯氣に蹄退去り

東魚＝釜拂ひが、折から煮立つ釜の湯氣に吹かれて、身を退ける可笑味。

塵山＝事實にありさうなことで、巧まぬ滑稽である。

省二＝主として十二月下旬に來た。神妙らしい顏をして居る折り、湯氣が吹出して後退りする。こんな事には經驗はあるであらう。後にはその巫女が實色などをした。『釜拂われは乙女の氣であるき』。『竈拂時々無隨な聲を出し』。

（286）

知行に持て見たいよし原

省二＝不夜城だもの。然し實際に持つてみたら、隨分迷惑な手數のかゝるもので、後悔するならん呵々—（御知行に五丁町ほど穴が明き—と云ふ句もあつたと思ふ）

東魚＝何石といふ取入れはなくとも、素晴らしい租稅がとれるであらう。と算盤づくの解をするより、あんな面白い處を知行に持つたらと、簡單に氣分的に打興じたと見るべきであらう。

塵山＝打算的でなく、只斯くあらばと思ふのである。

（287）

夫婦連にて分ンな溫泉に入

省二＝「分ンな」とは分相應の意。夫婦での入湯氣分を示す。

東魚＝「夫婦連」と云ふので、じみな趣が受取れる。浮いた遊山氣分でなく、質素な身分相應な湯治をするとであらう。

塵山＝身分相應とも不相應とも、兩樣に解釋される。

（288）

子安婆々分別過た名なりけり

省二＝「分別過ぎた」とは、物事につき餘りにも考へすぎたの意。子安婆々とは考へ落ちのやうな名だと云ふのだ。普通は取揚婆々と云ふのに。子安は子供の安泰を意味する詞らしいが、一般には子安觀音子安地藏或は子安貝などと云ひ、皆安產に結びつけられ、此の子安婆々も同樣に用ひたものだ。—「大名を胴切にする子安婆々」

東魚＝安產うたがひなしの、產婆と云ふ意味らしいが、ちと緣起をかつぎ過ぎた樣な稱呼だと云ふのであらう。前說の如く觀音樣や地藏樣なら聞えもするかとの心持である。

塵山＝前の兩說に異議無し。

（289）

手を突て見る葉隱れの瓜

東魚＝地面に手をついて、低く生つてゐる葉隱の瓜をのぞいてみる情景である。

塵山＝地に手を突いて瓜を見るといふ事は、實際には無いと思ふ。

省二＝特に探した場合であらう。

武玉川研究正誤表（第二三六號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
十二	二	四	門で	へ
十三	一	二	免角	兎
十三	一	十三	太鼓	大
十三	一	十八	太鼓	大

募集句

一路集

孤篷選

白兵戰　風柳
白兵戰御守りさんが割れてゐた　乙平
白兵戰軍犬も負けじと突撃す　平次
白兵戰決死で突けば壕はから　佳春
白兵戰見上る様な奴を突き　詩朗
突撃の聲に白木の箱も搖れ　好郎
村正がよく切れましたと軍事便　照二
白兵戰軍旗はしかと腹にあり　伊太古
三代の矜持日露の刀疵　武士
白兵戰闇に鋭く合言葉　初舟
白兵戰もやつたとだけで語らない　晶平
白兵戰笑ふ餘裕の有る强さ　邦太郎
白兵戰そこで日記がとぎれてる　福平
白兵戰後には白し月一つ　琴美
さし上げて白兵戰の繪馬を見せ　翠柳
講談は白兵戰を殘しとき　よしを
血達磨の一機が挑む白兵戰　默雷
演習と同じ氣持で敵を突き　寒井
先頭を小隊長の日本刀　龍夫
白兵戰終れば虫が鳴いてゐた　鷄城
白兵戰夢中でしたと歸還兵　彌生
鉛筆で白兵戰のいゝ覺悟　蓑笠
デング熱マラリヤの兵も突撃す　青芒
（佳）白兵戰敵の心臓突いた音　祥月
（軸）水盃アッツ櫻の上にすて　孤篷

北支征破回顧斷片（其五）

加川泉泡

〝故山地伍長に捧ぐ〟

〇〇高地に向けての攻撃、彼我の銃砲聲が物凄い唸りをたてゝあたりに谺してゆく。カチーンと私の鐵兜をかすめた銃彈の音!!瞬間「やられたッ」聲の主をふりむいてみると祖國船出以來肉親以上の交りをつゞけて來た山地ではないか。「シマッタ」と思つて目の處をおさえて滑つてゆく山地をみた「心配はいらない、山地をたのむ行け行けッ」〇〇班〇隊長のあびせかけるやうな、そして友情を知る溫い言葉をうしろにして私は懸命に滑つてゆく。山地のあけにそまつた右腕をグッと肩に持ちあげて「俺だ、俺だ、しつかりするんだぞ」かすかにうなづいたみけんからドクドクと黑い血が流れて私のドロドロの服に泌みてゆく。〇〇高地昇り口から約二丁の地點に衞生隊本部がある。私は物凄い速度でこけつまろびつゝ「山地ッ山地ッ」と叫びながら山を降つて行つた。突然頂上で占領の萬歳がこだまして來るや山地は左手で私の腰をいやと云ふ程たゝいた。私はくるりと頂上の方に向き直つて喉も裂けよとばかりに萬歳萬歳を叫んだ。山地もグッと私の肩を强く締めつけて瞳を大きくみ開いてモグモグロを動かした。そして血みどろの顏一面に滿足の泪が幾筋も幾筋も流れて居た。

急にガクリとなつて益々重くなつて來たので衞生隊の位置に又かけだした。グッとかついで居る右腕は心なしか冷く感じ固くなつて來たやうだ。「もう駄目だ」と思ひながら「オイ山地一寸の辛抱だ山地山地ッ」ゆすぶりゆすぶり泣きながら走つて居る私の足はスクンで思ふやうに走れない。やうやくたどりついた衞生隊……血走つた目に塵と汗にまみれた顏、服は山地の血潮でドス黑い私の姿を忙しい部員は一寸横目でみたゞけで各自任務に向つてセッセと仕事をして居る私はこの忙しい部員をかき分けながら軍醫の前に行つた。

「軍醫どのお願ひします」「君もう死んで居るではないか」「軍醫どのたとへ死んで居りましてもお忙しいでせうけれど、山地の手をにぎつてやつて下さい。お願ひです一寸でもにぎつてやつて下さい」。

「ヨシおろせ」「ハッ有難う、有難う御座居ます」。山地ッ山地ッゆすぶれども應えなき山地に私は水筒の口をあてゝやつた、死んで居るものを特に忙しい衞生隊々長は溫い瞳をさしのべて一通り看てやつて呉れたことは山地として私として此上もなく嬉しい限りでした。

好漢山地……無二の戰友山地!!〇〇班に於て軍の神經となつて敵中をかけずりまわつて〇〇に任じつゝ雄々しく散つた山地を私の手に依りて衞生隊のうらにある名ばかりの火葬場に運んだ。硬直した足にくつゝいて居る靴がいかにもギコチなくまるで人間の足でないやうに思はれる。高粱と壞れて居る家屋の木材を積み重ねて火を放つ、火力ははげしく戰友をつゝんで居るであろう。青白い陰慘なる焰がメラメラと這ひ昇り始めると異樣なにほひが鼻をつく。この火を目標に轟然たる音をたてゝ敗兵のうつて來る追擊砲彈が炸烈して破片がヒューと頭上をかすめる。この中に在つて眉一つ動かさず青白い焰をみつめて居ると山地の顏が後から後からうかびあがつて來た。私は其度に合掌して安らかに眠れかしと冥福を祈りつゝ〝きつと仇はとるぞ〟と誓つた。煙は曇りがちなる北支の空を焦し風にのつてはるかなる彼方に消えてゆく。流彈亂れ飛ぶなかに在つて戰友の骨を拾つて衞生隊から貰つた晒にお骨をくるんだ。そして首に戴いてひたおしに進んで征つた本隊に向つて追急するのだ。〝おい山地ブチも色づいて來たぞ、そうだ内地は秋祭りだネ俺たちの秋祭は太原攻略戰だ。あばれてあばれまくつてやるぞ〟

夜になると支那家屋で線香を失敬してきては心ばかりのおとむらひをなし、つかれを忘れて語りあかすことも度々であつた。敗兵になやまされつゝ敵死體や馬の死體に戰友苦鬪の跡を偲びながら漸く〇〇班隊長のもとに到着、大戀慕んで呉れた。

兵隊たちも夜があけると、

「今日は山地は俺の脊中で敵ととり組むんだ」

「いや山地は俺の脊中で敵を追ふのだ」

「はなせ俺だ」と限りない戰友愛に慕びながら山地の英靈に護られ太原へ太原へと破竹の勢で進んで行く。

太原をめざす背中に遺骨あり

御入院は
需
一ず應にめ
谷内小兒科病院
醫學博士　谷内與一郎
大阪市港區市岡元町二丁目（電車道）
電話　西四四八一番
八〇三七

川協のページ

柳界展望

係・銃人

催

▼本社主催「川柳忌」句會は九月四日午後六時半御津八幡宮にて開催▼川・雑布施支部句會は廿五日六時半城東商業學校にて▼松坂鑿能講習所川柳講座は三日、十九日午後二時▼有恒倶樂部川柳講座は十日・廿八日午後四時▼大阪遞信川柳會は十六日午後五時▼川・雑花園支部は十八日午後六時から妄夢居に於て開催▼阪大川柳會は廿七日午後五時開催

消息

▶朝鮮文人報國會川柳部會（京城）では川柳壁新聞を企畫、本誌の句も隨時掲載される筈▼岩崎柳路氏（不朽洞會員）は八月十七、八の兩日張家口劇場に於て開催の皇軍感謝演藝大會に出演、安達ケ原三段目の敷妙姫に扮し好演された▼上田翠光氏（不朽洞會員）が離布された▼川雑松江支部では九月五日夜梶谷龍人氏の送別句會を催された▼加川泉泡氏（不朽洞會員）は六日より社用にて横須賀へ出張十日歸阪▼富岡白峰氏（不朽洞會員）歸阪された▼市川周峰氏が歸阜された▼路郎主幹は十五日夕阪神産報大阪事務所新舘に於ける産報講座第三回職場文藝會に臨み「川柳とはどんなものか」に就いて約一時間餘にわたり講演された▼福井福平氏（花園支部員）離京▼「普天隨筆」刊行記念會を十五日夜、長堀の大市に於て開催、主賓戸倉普天氏に、麻生路郎氏、中島生々庵氏、橋本緑雨氏、戸田孤蓬氏等が出席された▼仲本玄同子（不朽洞會員）は十六日—廿一日の大阪美術館に於ける乾坤社美術展へ大作「御笠山」（六曲一双）を出品された▼西垣錦風氏は歸阪後、不朽洞會員となられた▼梅本塵山翁は昨冬より神經痛にて就褥され勝ちの處に今春來知覺神經麻痺を併發され起居御不自由の由、本誌の「武玉川研究」に尚老體を押して執筆される翁の爲に、一層の御攝養を祈つてやまない▼松谷米太樓氏（大阪）が歸阪された▼前田五健氏（客員）は伊豫方面の風水禍に勤勞報國隊として活躍された▼二十二日夜、朝日會館で朝日映畫社の文化映畫の試寫があり川雑の句會部、編輯部の人達がズラリと並んで觀た▼麻生アート君は九月廿三日夜歸省、廿五日夜離阪された▼路郎主幹は有恒倶樂部午餐會で廿日午後一時から「戦時生活と川柳の力」と題して講演され好評だつた▼關西精動作家協會が、大政翼賛會大阪庶支部の肝煎で近く生れる大阪文化協力會へ發展的解消をすることとなつた

慶弔

▼大阪形水氏は九月廿九日二男創三君を儲けられた▼上田翠光氏は九月十日女子を擧げられた▼田村八郎丸氏（山口縣）が永眠された哀悼▼釜永睡花氏（神戸）は八月廿九日に逝去、謹んで悼む

轉居

▼小川百雷氏經營の大阪廣告通信社は大阪市東區伏見町二丁目伏見町ビルディング二階へ▼菊川泰平樂氏は安東市旭日區南一條通二丁目六一へ▼橋本波夢造氏（不朽洞會員）は堺市出島海岸通二丁目百二六番地（舊宅南二丁）へ▼田中松男氏は大阪市住吉區西長居町一五八へ▼西垣錦風氏は大阪市南區鹽町一丁目へ▼德永雅美氏（不朽洞會員）は奈良縣吉野郡吉野町丹治藤内久太郎方へ▼立川蹴二氏は大阪府南河内郡初芝住宅地へ▼中見光路氏は大阪市東區瓦町二ノ廿三へ

改號

▼川西清月氏（西宮）は井魚
▼清水秋子氏（大阪）は牘子
▼長田醉童氏（大阪）は醉堂

★社の回覧板

★不朽洞新會員發表

大阪　西垣錦風氏（丹路氏紹介）
大阪府　桝田松緑氏（泉泡氏紹介）
尼崎　土産光洋氏（同）
芦屋　執行礎石氏（同）
大阪　倉三葉氏（同）

★支部幹事の更迭

川雑布施支部では幹事上田翠光氏離布のため中村聖司氏が後任幹事に推薦された

★鳥取川柳人への震災慰問品は本社で取纒め大西八歩氏（不朽洞會員）へ向け發送した慰問品寄贈者各位へ深謝

廻轉椅子

★戦局もいよ〳〵決戦段階に這入つて來た。皮を斬らせて骨を斬る覺悟が一億の一人々々に要るこの時この際川柳人の敵愾心は灼熱の鐵の如く強い句とならねばならないが、その作品の上に、カメラを提げてウカ〳〵要塞地帯へ立入るやうな句を作らないだけの慎重さを要する。

★本誌前號は白熱的な好評振りだつた。殊に戦線の人達が逐號熱讀され、更に次號への期待をかけてゐられる狀態を知つては涙ぐましいものを感じ、編輯部の不眠不休ぐらゐ物の數ではないと思ふ。

★本號へは高尾亮雄氏が「兒玉花外を憶ふ」を寄せられた。兒玉花外が川柳人でないことは云ふまでもないが日本詩壇に於ける最高峰の名聲に反して物質的には惠ぐまれなかつた翁の生涯を憶へば同情を禁じ得ないものがある。

★西田艸樂氏は「草木徒然」の續稿「沈」を、淺田博士は「語源覺書」の續稿を、不死鳥氏は「硯滴と神風賦」を發表。

★芥川芥子男氏が「句評川柳塔の一句」を寄せられた。その人らしい觀方である。

★拙稿「初等川柳講座」は直喩法の句、隠喩法の句、換喩法の句、提喩法の句、倒置法の句の五講である。大いに頑張つた。御愛讀を乞ふ。

★誌面の新味を企劃すると同時に嚴選によつて、本誌掲載句の價値を高めることとした。斯くすることに由つて多少の落伍者のあることは豫想に難くはないが、それも又止むを得ない。權威ある本誌を法城の如く護る人々の健闘をのぞむや切である。

★本誌は前號よりも多少遅刊はまぬがれまい。それはあまりに多忙な私が遂に病臥したからである。御諒恕ありたい。（路郎生）

片瀬醫學博士述「安産のために」冊子呈上

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町　和田卯助商店

楢林醫學博士　推奨
片瀬醫學博士　監査

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼宛先は本社宛

川柳忌

九月四日　於御津八幡宮

初代川柳が寛政二年九月二十三日に長逝されて既に百五十四年になる。川柳雑誌社では忌日を繰上げ九月四日夜に修營することとなり、柳祖を偲ぶ柳人多數の參加を得て、和やかに開催された。互選句の披講に續いて鮎美氏の前月の句會の句に就ての指導的講評があり、益する所多大であつた。路郎師の「初代川柳のことども」は柳祖の肖像より初められ、職業、居住地、柳樽等のことについて、新しく柳界に足を入れられた方にも、古參の人にも興味深く語られ、特に柳祖の研究を集ふ柳人に希望されつゝ柳祖に對する師の情熱は盡きるところを知らなかつた。席題兼題の披講を終へこの和やかな集ひを解いたのは九時過ぎだつた。（妄夢）

出席者（順不同）

路郎・翠光・惠美須・よしを・鮎美・武良里・茂・石園・晶平・拓郎・紫香・嶺泉・潮花・武美・葛藤・香林・正也・三葉・朝美・詩朗・好郎・龍夫・光洋・泉泡・柳笑・三司・久男・喜世志・琴美・豆秋・妄夢・邦太郎・完・一勢・栞・萬的・不二・松緑・井魚・鳩巴・天龍・寒浪・奈那・梨里

兼題「お經」　路郎選

重役がある日お經の事にふれ　路郎
ばあさん子教へぬお經もう覺え　惠美須
ひらかなで覺えたお經とは見えず　香林
南無妙法蓮華經おんなまだ若し　水客
お經がすんでひぐらしの聲のこり　喜世志
八十路への佛間たのしいお經なり　よしを
三回忌お經の横へ子が座り　紫香
讃經の中の一人は雨を聞き　不二
お悔みの一人お經もあげて去に　朝美
新佛妻の宗旨のお經なり　同
助かつた話お經唱へてゐたといふ　栞
下手な節お經になつた面白さ　同
蚊が出たかお經の文句とぎれたり　拓郎
お茶を出す間もなほこまおんあぼきやあ　香林
自轉車の動悸が止まぬ三部經　豆秋

兼題「汗かき」　豆秋選

献立のカレーみつめて汗をかき　茂
汗かきのどちらも裸でうまが合ひ　柳笑
汗かきへ犬がなか〳〵鳴きやまず　妄夢
死にそうな聲で汗かき服を脱ぎ　翠光
汗かきにハンカチ一寸小さ過ぎ　寒浪
意見する親父やつぱり汗をかき　よしを
この通りですと汗かき背中見せ　好郎
汗かきが衣料切符を忘れて來　三司
汗かきの方へ向かない扇風機　潮花
汗かきが遲刻して來て哀れなり　栞
汗かきでネーと先輩臍を出し　三葉
汗かきが坐つた型をつけて去に　同
汗かきの戰友だつたと話し　詩朗
見るからに汗かきらしいビール腹　同
汗かきのとこだけ父に似てゐます　光洋
汗かきへ大きな西瓜切つて出し　同
臍出してゐる汗かきの社長さん　豆秋

席題「袂」　栞選

舞姿元祿袖もみやびあり　鳩巴
振袖のむかしを殘す人形箱　水客
袂から可愛いじんべ二枚出し　朝美
ふくらんだ袂を子等は見逃がさず　茂
ブラウスを脱いで袂でゆくお花　潮花
振袖は力の足らぬ聲で呼び　香林
袂からシデ紐も出す大旦那　好郎
いゝ柄を見つけた方が袂をひき　紫香
もう一度寫眞屋袂を直しに來　同
元祿の袖で昭和の決戰記　不二

席題「月」　水客選

金借りに來た夜も同じ月があり　妄夢
燈臺へ灯が入るころを月が出る　惠美須
鐵かぶと青く照らした十三夜　泉泡
落ちて行く月を見てゐる筏さし　潮花
一日の疲れを月へ明け放ち　香林
月すでに昇つたあとのあんずの實　鮎美
部隊長ある夜は月へ一人立ち　不二
作戰の地圖を持ち出す月明り　同
月明りアルミの一錢見付けたり　同
バス曲るとこできれいな月があり　紫香
一人旅廊下へ月を賞めに立ち　同
二驛は歩いて歸るいゝ月夜　同
旅をする母に嬉しい月あかり　柳笑
見送つた歸りを月がついてくる　水客

席題「行過ぎ」　互選

行過ぎた角にも煙草屋散髪屋　邦太郎
行過ぎた背中は輕くたゝかれる　翠光
行過ぎた辻で小犬に見上げられ　紫香

雑川柳　梅田支部句會（大阪）

うたゝねへ今日もかしまし蟬の聲　鮎美報
轉寢の父の毛脛が少し痩せ　美代子
浴衣にも擊ちてし止まむヒマの柄　武良里
お祖母さんきちんと糊のある浴衣　喜弘
よくきいた糊の浴衣を子が嫌ひ　茂
浴衣の子父の歸りを迎ひに來　綠葉
風に搖るゝ浴衣の柄へ赤とんぼ　文代

雑川柳　廣島支部句會（廣島）

八月三十一日　久米雄報

大休止街に軍歌を聞く夜なり　九の字
先頭は角を曲つてゐる軍歌　麥穗
班長を圍む軍歌へたそがれる　朱香
あの軍歌聞けばあの日が又浮び　多士樓
赤ん坊へ風車の色が唯まわり　幽香里
赤ん坊何か見てゐる目をひらき　喜久司
圓い輪の軍歌の中で友は征き　貞榮
行末を見て下さいと配達夫　可學
服は皆汗びつしよりの軍歌なり　美爾坊
百萬の家督と知らず赤ん坊　比呂志
御遺族を訪へば赤ちやん匐ひ出る　愛雛
鉢卷も取らず奉仕の握り飯　三昧
團欒の輪に赤ん坊一人立ち　獨笑
公休だ辨當今日は山へ行こ　七郎
まぜかへす子へ交代でする食事　望水
二等車で花嫁むすびすゝめられ　松子
行末を語るにあまり幼なすぎ　鷄子
日本を背負ふ小さい手の溫味　水客
行末を人に聞かれる不倖　柳太
赤ん坊の脊伸び日本を負ふ構へ　市多樓
勝つて來る覺悟軍歌に取り卷かれ　井蛙
辨當が一番でかい恥しさ　春集
赤ん坊まづ爆音の眞似が出來　麥作
赤ん坊女と聞いて無事をほめ　清月
病む馬がかすかに聞いた進軍歌　久米雄

雑川柳　出雲支部句會（出雲）

八月七日　於研路居　綠之助報

鶯の志願に母も目醒めて來　光子

海鷺の夢何日も白亜館　彦一
海鷺に何處まで續く雲の峰　さわだ
清流の上は繪になる樣な橋　同
清流へ靜かにトンボ群れて居る　研路
故郷に似た清流に偵察行　綠之助

雜川　**梅田・西宮支部合同句會**

八月二十八日　於尼崎善通寺　泉泡報

極樂を願ふ親子に損ばかり　三司
極樂とんぼ蓮のうてながちと動き　鮎美
極樂は此世だつたと父の風呂　茂
極樂の話へ足がしびれて來　喜弘
彌陀如來みな極樂にやるお顏　泉泡
親切に持つた荷物が重たすぎ　喜弘
親切な人もう一度振りかへり　美世子
汗の荷の重さへ力添へてやり　茂
肩書が一寸淋しい名刺だし　井魚
一言も云はずにすんだ初對面　光洋
初對面言葉すくなく別れて來　鮎美
全快に近く藥を忘れかけ　綠葉
犀角を尋ね〳〵た子の痲疹　同
子の藥すかしてみるも親心　由布
新藥の名をむつかしく讀み直し　三司
高貴藥文字で病が癒りそう　茂
新藥が母の病に親しめず　同
藥の名スラ〳〵云へてやせてゐる　礎石
カルモチン呑んで寢附けぬ一時二時　史風
輸送船大海原はまだつゞき　喜弘
錬成の海までつゞく夾竹桃　綠葉
憧れる海に男の意氣は燃え　邦治
人を呼ぶ聲遠ざかり海昏るゝ　巳司
夕風の海の蒼さに二人きり　泉泡
片言の子に朝顏をかぞへさせ　井蛙
警戒警報車掌の聲に窓をしめ　昭宏
バスガール傷む勇士に背を貸し　東光
乘換を地圖で車掌に教へられ　井蛙
新米の車掌に事件大き過ぎ　游記
發車ベル車掌押し込む樣にのせ　井蛙
乘れるだけ乘せて車掌は外に立ち　市多樓
衣料切符不要裸で夏を越し　喜樂
編隊に夏雲呆氣なく亂れ　茶目坊
石鹸はもう要りませぬ秋の風　市多樓

雜川　**小郡支部句會**（山口縣）

八月二十八日　井蛙報

雜川　**西宮支部句會**（西宮）

七月十七日　泉泡報

うたた寢へ早い内湯を知らして來　松綠
大聲が地聲でネと高利貸　泉泡
大聲で唄つて歸る夜の道　節子
晴姿若き日の母偲ばれる　登美子

雜川　**三池染料支部句會**（大牟田）

八月二十八日　於早鐘講堂　蝶人報

西瓜屋の打診みごとに味をあて　平人
一家皆寄つて西瓜は眞二つ　天風
近視眼地見屋の慾を知らず行き　抱逸
荒鷲があきらめ切れぬ近視眼　十四之
御遺族はこちらへ半額券うれし　十四之

雜川　**下關支部句會**（下關）

半休報

兄が出て螢は草の露へ去り　井蛙
斥候の任務へ月が邪魔になり　米三
月が脊に廻つて歩哨立つたまま　九呂平
若鷲の覺悟はつきり父母に告げ　抱逸
若鷲に體當りする敵がなし　市多樓
南海の島へ苦闘の日がつゞき　半休
あんな島位に世界中が揉め　不水
飛行服父そつくりの咳拂ひ　望水

雜川　**神津支部句會**（大阪）

八月十三日　於香林居　香林報

日本中秋薪割臺へのせ　伊太古
双葉山ヨカンペ凧のやうに見え　乙平
筒袖は脊中を掻くに一寸困り　同
フツツリと袂を切つた氣の輕さ　嶺泉
祖母來れば何か出さうな袂なり　若榮女
箱舟に御先祖居ます河の風　若榮女
盂蘭盆へ母新らしく涙する　嶺泉
盆まゐり僧はあわてゝ下駄を穿き　香林
氷屋の暖簾見る目も涼しそう　乙平
氷かきながら將棋の助言する　嶺泉

雜川　**花園支部句會**（大阪）

八月二十一日　於木阿彌居　妄夢報

名譽ある男に生れ散髮屋　潮花
デパートへ男約束はたしに來　同
はなうたとなつてやもめが米をとぎ　風柳
男々陸海軍は多忙なり　九茶
男氣の損を見越していゝ返事　同
强い子と云はれ泣き止む男の子　悟呂
妻や子へ意地を通した日が淋し　風柳
春先の書面花から書き始め　惠美須
押花に託し銃後のことも告げ　幽王
雜草といへども花が咲いてゐる　登志緒
爪切草子の箱庭で咲き始め　風柳
先代の遺産見憎い記事となり　潮花
先代の羽織で義理をたてに來る　同
先代の夢を又見た老女中　邦太郎
月ほめる相手もなくて窓を閉め　妄夢
富士山が窓一ぱいに見えてきた　惠美須
常會へ窓ぎわ先に陣取られ　木阿彌
トンネルに窓の子供のあわて樣　邦太郎
窓際に椅子を並べる晝休み　同

雜川　**西宮支部句會**（大阪）

九月十一日　泉泡報

相談をすれば女房よく喋り　三葉
相談をして置きますとうまく逃げ　松綠
相談にあづかる程に顏がうれ　光洋
相談のひとりが笑うのをとがめ　鮎美
湯上りの裾は涼しい錦魚鉢　登美子
湯上りへ糸瓜の風も少しあり　三司
雨あしがきつく話のとぎれがち　妄夢
この邊に地藏があつたハイキング　東雀

雜川　**布施支部句會**（布施）

八月二十一日　於城東商業學校　翠光報

兵隊さんに恥しくない汗をかき　周次郎
朝露へきつちり揃ふ奉仕班　華素兒
奉仕して稻の刈り方教へられ　明
汗ぬぐふ間もおしまれる奉仕隊　ふき枝
奉仕から米をこぼさぬ主婦となり　義章
階級を捨てゝ奉仕の鍬をとり　翠光
万才師客の笑うをみて笑ひ　龍夫
月當番西瓜ですよと笑顏見せ　愛子
貰はれて行くに乳呑子笑つて居　聖司
遲い子へ交通事故を思ひ出し　龍夫
思ひ出をけなす倦怠期の夫婦　呑海
思ひ出にしてと男の薄情な　聖司
これだけは殘しときたいかたみわけ　翠光

雜川　**あざみ婦人句會**（大阪）

七月二十三日　於花鶴子宅　潮花報

五本一組これはお客へ出す團扇　まゆみ
子等ころり團扇の風で寢てしまひ　萬龜子
トンネルをぬけた眞下に海せまる　花子
子の遊ぶトンネル蟹が這ふてゐる　早苗
トンネルへかゝる汽笛を聞いて讀み　秋子
關門トンネル鯛やヒラメを驚かせ　綾子

トンネルが出來て汽車着く村になり　花鶴子
トンネルを風もいつよに通り抜け　水月
海水着娘同志でさはぐこと　綾子
海水着だん〳〵磯が遠くなり　千代
松原へテントを張つた海水着　花奈女
海水着子のある人に見えぬ色　花鶴子
海水着今日はプールへ泳ぎに來　花代子
海水着女中は淺いとこで待ち　花子
海水着泳ぎ知らないとも見えず　水月
大洋を乘り切りそふな海水着　順子
若鮎に似てあざやかに飛ぶ水着　夏子
口笛が待つてる丘の月見草　ひさみ
口笛へ兄とわかつた管制下　花代子

市電川柳會（大阪）

八月二十一日　於監督係分室　翠芳報

輸送戰木造船も起ち上り　朗舟
木造船太平洋も乘り切つて　綠雨
半ズボンやいとの跡が見える也　同
半ズボン脛の長さを撫ぜて見る　青雲
汗汗汗敵擊滅の進軍だ　一瓢
パンツまで洗はぬ娘こゞと聞く　水月
病床の妻洗濯に氣をつかひ　青雲
節水をして洗濯が上手なり　夢想
洗濯の手で泣いてゐる子をあやし　朗舟

阪大川柳會

八月廿五日　利生報

ありや叱られ役ぢやと他人が云ふ　一彌
叱られて居る母ちやんへ子供つき　正甫
えろう叱りなはんなやと母例をひき　栞
この邊と叱られ役を母が買ひ　同
老眼を拭いて叱られ役に立ち　同
叱られる豫感ホックをしかとかけ　同
叱られてゐても手傳ふ里の母　同
叱られた昔忘れて謝恩會　柳秀
叱られた女中は箸に手をつけず　同
高飛車に叱りながらも世話する氣　同
ちと歳と相談せよと叱られる　正甫
叱られる度胸我が子と思はれず　春巣
叱られたあとゝ思へぬ飯の數　柳秀
消毒のすまぬその手で煙草すひ　利生
消毒を濟ませて產婆手を焙り　柳秀
子澤山沃丁を持ち「あか」を持ち　同
遠慮して叱られる程氣に入られ　小糸
度の過ぎた遠慮へ少し腹が立ち　正甫
原惣右衞門の邸と聞いて懷しみ　筑川
身代りの御守もあり觀世音　楠水
消毒も忘れ勝ちにてみとる母　筑川
この邊がさすが女の慰問文　柳秀
殘業のわが子いたはるお茶を入れ　同
賣るために書く原稿を淋しがり　同

松坂藝能講習所川柳會（大阪）

八月一日　白面人報

昇給の嬉しさバスを乘り違へ　好郎
兄さんの戰果へみんな泪ぐみ　香林
試驗バス公衆電話さがしあて　不二
正式な通知は追つてとうらやまれ　同
敵性の文字は盲であつてよし　乙平
停電に盲話を續けて居　聖司
つまづいて盲にこ〳〵立上り　好郎

有恒川柳會（大阪）

八月二十七日　鋭々報

「妻からも」なんて此頃板につき　青美
子供等の生年月日妻にきゝ　同
働ける姿わが妻と呼びかけん　鋭々
迷信の外は素直な妻であり　同
物笑ひ緣談詐僞は言はんとこ　青美
自らを嗤ふくらしに墓がある　鋭々

遞信病院川柳會（大阪）

八月十六日　於圖書室　沒食子報

收穫れの準備殘暑に忘れてず　小澤
夕涼み二百十日の話も出　宮本
月淡し敵前悠々飯を炊く　榮實
拔かりなく炊事茄子を干してゐる　沒食子
掃除婦と見えぬ歸りの身だしなみ　晴夫
獨身者猫にやるよな炊事をし　卓二
庖丁で猫をおどして炊事する　竹莊
休憩に掃除婦同志愚痴が合ひ　同
雜草が茂り殘暑が野を涉る　方正
飯炊きの汗も知らずに嫁き遲れ　同
虫一つ老炊事長呼ばれたり　同
何もかも秤つて味が調はず　喜由
密林戰糧の煙をねらはれる　同
掃除婦へ冷たい飯が待つばかり　同

艸生會川柳會（大阪）

八月三十一日　於花蓮亭　是牛報

將來性を云々されて破談らし　多加史
將來はラクをしたいも親馬鹿さ　同
えんな娘が末はあんなになつてしもた　是牛
荒鷲の世繼ぎ三人と住む夫人　同
割箸も二度のお役に乾してあり　同
割箸を換へてる客もある今夜　同
一膳飯無雜作に箸立てゝあり　隔山
久濶に箸も割らずに話込み　同
割り損じた割箸のやうな別れかた　多加史
サービスの蛇足さ割箸割つてくれ　同
おのれだけ割箸であるも客らしゝ　同
割箸を逆手にもつた話好き　路郎

千石莊川柳會（貝塚）

八月二十五日　無一物報

貯金帳見て今月も皆勤し　繁代
貯金帳間違える程子澤山　川柳
小遣ひにと送れば母は貯めてゐる　春太郎
通帳の下段よごして病みつゞけ　魔沙王
俸給を貯金したまゝ兵は散り　秀朗子
一豐の妻に負けまい貯金帳　勝
新婚の貯金へ賴むこと多し　庸司
女房の便りの誤字をなつかしむ　樋口
蒲流しを八日の旗がたしなめる　千舟
配給へ妻の料理の腕が冴え　千代
箱植で採れた茄子の味を賞め　友三郎
下駄はいて見たし病院からの街　莊兒
消燈へ便りの餘白惜しみつゝ　春一
僞裝する兵一輪の百合を差し　庸司

もしほ川柳會（廣島縣）

九月五日　於蟻蜂居　翠柳報

母性愛父に負けない子に育て　梅香
占領を母の寫眞へ告げて居り　雅風
座布團をかけて人形と寢てしまひ　鬼笑
召され征く心靜かに陽を拜む　翠柳
アツツ島雪の寫眞へ溯く涙　帆休
獸送の中に小さな母の髻　默雷
日の丸を心に立てゝ御奉公　義朗
故郷の土最後と强く踏んで征き　思意
家も親も捨てゝ大義に生きて征く　陽炎
夕立が止んでまた聞く岔太鼓　朴想
玉碎の報に靜かな母の顏　浩三
夕立にぬれて戻つた短氣者　同
虹ばかり見せて夕立どこへゆく　紋平
征く時のまゝが老母に生きており　愛坊
我が家の味しみじみと湯にひたり　蟻蜂

社關係の人々

主幹　麻生路郎

賛助員　池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　戸田孤蓬　高澤一浪　布施筑川　北川春集　國弘半休　乙谷乙平　伊古田伊太古　中村聖司　阿萬萬的　岩崎水虹　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　酒井美知夫　小林文月　谷川緣風　福田妄夢　橋詰東雀　鹽谷鯛好坊　水谷琴水泡　加川泉　井上登志緒　巽一無一物　西野望　岸田風柳　關惠美須　井村寒浪　新川博也　梅田秀溪　唐澤朝美　菊澤小松園　杉原大研子　好崎申仙　濱田久米雄　中原銑人　櫻川不水　西尾栞　飯尾寄與史　上田一翠　河野夜王　谷口綠葉　德永雅美　河野玲之介　浪野柳太　小川恒明　谷川萬萬的　阿萬正　小林文月　酒井美知夫　關根山彦　押谷たけを　佐竹香附子　尾崎方正　布施筑川　北川春集　國弘半休　乙谷乙平　伊古田伊太古　中村聖司　福田妄夢　橋詰東雀　鹽谷鯛好坊　水谷琴水泡　加川泉　井上登志緒　巽一無一物　西野望　岸田風柳　關惠美須　井村寒浪　新川博也　梅田秀溪　唐澤朝美　菊澤小松園　杉原大研子　好崎申仙　濱田久米雄　中原銑人　櫻川不水　西尾栞　飯尾寄與史　上田一翠　河野夜王　谷口綠葉　德永雅美　河野玲之介　浪野柳太　小川恒明　谷川萬萬的　阿萬正　小林文月　谷川緣風

燃ゆる敬神輝く日本

伊勢大神宮
橿原神宮
熱田神宮
参拜

急行終日頻発

関西急行鐵道